

「神の愛を信じられない人へ」

ヨハネの手紙一 4:16-19

主任牧師：重田 稔仁

<メッセージ>

神の愛を信じられない人へ

ヨハネの手紙一 4:16-19

序

私たちはみな、格言が好きです。偉人が残した人生訓とか。

受験生を励ます熟語 ～初志貫徹 大願成就 忍耐 根性 努力

クリスチャンが好きなことばNo. 1は・・・”神は愛なり”でしょう！

1ヨハネ 4:16

今朝はこの言葉のルーツとなっている聖句をテキストにメッセージをします。

聖書 1ヨハネ 4:16～19 まず朗読致します。

わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。

神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。

なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。

わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。

ヨハネの手紙一 4:16-19

導入

聖書の鉄板中の鉄板ネタで、弟子たちもそれを口酸っぱく語り、2000年たった今なおキリスト教会で語られている”神は愛り！”という神の真実を実感できないというクリスチャンが少なからずいることを度々見聞きします。皆さんは、いかがでしょうか。

なぜ、多くのクリスチャンが<神の愛を>実感できないのでしょうか。

その原因は、一つです

神の愛の何なるかを知らない

神の愛の何たるかを知らずにそれを待ち続けることの無意味さを気づかせてくれる劇曲にフランスの劇作家 アミュエル・ベケットによって書かれた”ゴドーを待ちながら”という演劇があります。

この演劇は、ウラディミールとエストラゴンという2人の浮浪者が、田舎道でゴドーという人物を待っていたところポッツォとその従者ラッキーがやってきてふたりと話を始めることから物語が展開しますが、4人の話が終わってポッツォとその従者ラッキーが立ち去るとひとりの男の子がやって来てウラディミールとエストラゴンに「ゴドーは今日は、来ないが明日は来る」というゴドーからの伝言を伝えます。これで一幕が終わり、二幕目を同じ展開で物語が進みますが、最後はウラディミールとエストラゴンが自殺しようと試みて失敗に終わり物語が終わります。

この”ゴドーを待ちながら”という演劇は人生の不条理について示唆していると言われますが、フーストン先生はこの物語を引用して私たちのクリスチャンライフに当てはめて、”ゴドーを待っていた”ウラディミールとエストラゴンとは神の愛の何たるかを知らないで、それを待ち望んでいる私たちのようなものだとして度々、語っていました。本来はゴッドを待つべきなのにゴドーを待っているクリスチャンがあまりに多いと。

私たちは神の愛の何たるかを知らないで、それを求め続けていないでしょうか。

今朝は、このことを吟味するために1ヨハネ4章から“神の愛とは、どのような愛か”と一緒に考えてみたいと思います。最初に神の愛について3つのポイントを上げてお話ししたいと思います。

(1)

1つ目のポイント

1ヨハネ4：17～18に＜こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します＞とありますが。4：17の＜この世でわたしたちも、イエスのようであるからです＞という文言が神の愛の本質について大切なことを教えています。それは、神の愛とは「神様がその独り子イエス様を尊ぶように私たちをも尊んでくださる愛情」だということです。

平たくいうと神様は私たちをイエス様のように、ご自身の子として愛してくださっているというのです。この神様の愛を知った日曜学校の子どもの喜びについて・・・

スコットランドのグラスゴーで夜の日曜学校をしていた時の体験

2つ目のポイント

神の愛について4：17に～裁きの日に確信を持つことができます～とあります。

ヨハネは神の愛は、私たちに絶対的な肯定感を与えると教えていますが。神の愛は相対的な世界に住む私たちにとって、私たちの存在の確かな土台なのです！

ローマ8：38～39「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」ローマの信徒への手紙 8:38-39

ところで何故、神の愛は、私たちにとって絶対的なのか？

それは神が私たちの造り主であり、決して変わる事のない絶対的な方だから

私はあって、あるものである

出エジプト3：14

「神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」」出エジプト記 3:14

3つ目のポイント

ヨハネは神の愛は無条件かつ無償の愛だと教えています。

わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです 4：19

この世の愛は多くの場合それを受けるもの側の資質、条件によって決定されます。

しかし神の愛は神によって無条件に私たちに与えられます。

何故、無条件に与えられるのか。

それは人は無条件に愛される時、初めて自らの尊厳について絶対的な肯定感を抱くことができるからです！

使徒ヨハネが説く神の愛の本質を知ってそれを経験するためには何が必要か

ヨハネは一言、その秘訣は“神の愛にとどまる、止まり続けること”だと1ヨハネ4：16で断言しています。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

神様の愛のうちにとどまる人は自らの存在価値を見出し、自らの尊厳を認め、自らの生きる目的を持てますが、神様の愛にとどまるということがわからないクリスチャンがあまりに多いのですが、

なぜでしょうか。

それは神様の愛を愛情として理解していないからです！

神様の愛とは私や、あなたへの神様のパーソナルな感情です。それは神様とあなたとの個人的な関係によってあなたに向けられる神様の愛情なのです。

神様の独り子イエス・キリスト(インマヌエルの神)は、人となってこの世に生まれ、神の被造物への愛を証しし、私たちの罪を滅ぼすために十字架にかかって死んで三日目に蘇ってくださった。それは、あなたや私が神様と和解し、神様の愛情に応答し神様とのパーソナルな関係に生きるためです。

私たちは神様の愛を、私と神様のパーソナルな関係における神様の私への特別な愛情だと理解しているでしょうか。

以前、ある大きなキリスト教に集会に参加したフーストン師が壇上に上がった説教者が会衆に向かって「I love you all」と呼び掛けるのを耳にして「Lier」と呟いてしまったと打ち明けてくれたことがありました。それは私たちに向けられている神の愛は直接的で個人的なパーソナルな愛情だとフーストン師が私たちに教えたかったからです。

みなさん、神様の愛は神様の私たちへの個人的な愛情です。愛情というからには、それには実体が伴います。

神の愛の実体とは何でしょうか、それは熱です！神様の愛情は激しく熱い！のです。燃える火のように。

キエル書39章25節にこのようにあります。「それゆえ、主なる神はこう言われる。今やわたしはヤコブの繁栄を回復し、イスラエルの全家をわが聖なる名のゆえに熱い思いをもって憐れむ」

ゼカリヤ書1章14節にはこうあります。「わたしに語りかけた御使いはわたしに言った。『呼びかけて言え、万軍の主はこう言われる。わたしはエルサレムとシオンに激しい情熱を傾け』」

この熱情の愛を神様は私たち一人一人に向けておられます。熱情を抱いて私たちが愛しているからこそ神様は私たちが愛するあたり痛み、苦しむのです。

この愛に私たちの目を開いてくださるのが神の独り子イエス・キリストです。イエス様は十字架の上で手に釘を打たれ、脇腹を槍で刺し抜かれ傷つき、苦しみました。

それは、ひたすら、あなたや私、罪人を愛してやまない神の愛の熱情を伝えるためでした。お互い、今朝、神様の愛の何たるかを知って、神様の愛を改めて経験させていただきませんか。

御霊が私たちに神様の熱情の愛を証ししてくださるように共に祈りましょう！